



明るく たくましい 明世の子

ビカリア

令和6年度
瑞浪市立明世小学校
NO. 9
R6. 11. 29

歩くことで育つ感性 (生活体験の大切さ)

紅葉と落ち葉によって、登校坂の景色が変わり、季節の移ろいを感じます。一緒に歩きながら、子どもたちにどんな音が聞こえるか、聞いてみました。「カサカサ」「カリッ」「シャーシャー」「サリサリサリ」などの擬音語が出てきました。葉の種類によって、硬い音や柔らかい音がありました。人に踏まれて細かくなって、こすれ合う小さな音、車が通った後の風に引っ張られて一斉に滑り落ちていく音などです。子どもの感じ取る力と、表現の豊かさ。同時に言葉のつたなさ。つたないからこそ、一生懸命に伝えようとする健気さに、子どもと一緒に感動を体験できる幸せを感じました。

さて、私たちが日本語を覚え、生まれ育ったその地域の文化や価値観を身に付けたのは、いつごろだと思いますか。実は、子どもの頃に身についた方言のイントネーション、味付けの好みなどはずっと変わらない、といわれます。うちの子は、3歳のころから、東濃弁を使いこなしていますし（東濃弁しか知らなかった）、五平餅やへボののこを知っています。また、「どんなに暑い日でも、雨の日でも、学校へは歩いていくしかないと思って通っていた。自分より小さい子が歩くから、高学年と一緒に歩いて帰ることが責任だと思っていた。」と言う子に育ちました。このことから、幼少期の体験が、各自のアイデンティティーやたくましさにつながっているということが分かります。そして、我慢や責任という、大人になっても必要な力を育てることになるのだといえそうです。



もう一つ、算数の授業を見ていて感じたことです。「37円と48円のものを買った。100円を出すとおつりはいくらか。」という問題に出会ったとき、今の子は100円玉や10円玉、1円玉を使って考えられるだろうかと疑問に思いました。スマホやカードを出して買うところしか見ていない。繰り下がりどころか、引き算を体験せずに、生活していないか。「13個の飴を4人で分ける。」とか、「4人で平等に分ける。」などの体験をしているかどうか、算数のひらめきの差につながっているのではないか、と思いました。1リットルという量の大きさや重さを知っている子は、体積や質量を、ペットボトル何本分と表現したり、図を描いて説明したりできます。

これらのことから、幼少期の体験やお手伝いの大切さが分かります。落ち葉を集めること、分団で坂道を歩くこと、お菓子を平等に分けること、めんつゆを5倍に薄めること、小麦粉と砂糖の重さを比べること、現金で買い物をする事、お風呂を洗うこと。どれも、学習につながり、感性や生きる力を育みます。子どもが小学生の時にしか味わえない感動があります。一緒に歩き体験する時間を楽しんでみてください。（参考：岐阜新聞 R6.11.16 ぎふで KOSO, 中日新聞 R6.10.12 学ぶ）